広報 安達太良

【巻頭言】

「魅力的な授業」を　～子どもの学びを支援する伴走者に～

本宮市教育委員会教育長　大内　順一

ある小学校に勤務したときに、６年生女子のＡ児に出会いました。Ａ児は周りの子どもとコミュニケーションをとることが苦手のようで、５年生の時から、不登校傾向が続いていました。週３日ほど、母親の送迎で９時過ぎに登校し、別室で学習をしました。担任はその都度声かけをしながら、教室に誘導しましたが、ただうなずくだけで教室に足が向くことはありませんでした。

そんなＡ児でありましたが、“ある場所”には、自分から進んで行くことができていました。そこは理科室であり、分科担任のＢ教諭が行う理科の授業の時間でした。私も何度かＡ児と一緒に授業に参加しましたが、Ａ児は同じグループの子ども達と実験や観察、そして話合いまでしっかりと活動できていました。普段見せる表情とは全く違うＡ児の表情、姿に私は驚かされました。Ｂ教諭は生徒指導主事を務めていましたので、Ａ児とのつながりは以前からありましたが、この授業においては特別扱いをせずに、授業を展開していました。Ａ児だけでなく授業に臨む一人一人の子どもが、生き生きと躍動している姿に私は感嘆の声を上げました。

「学校の命は授業」とか、「授業で勝負できる教師」など、以前からこのワードを耳にすることはよくありました。教職の道を進むということは、授業づくりに勤しむこととも言えるのだと思います。授業の主役と言える子ども達の目には、現在の授業は魅力的なものとなっているのでしょうか。子ども達にとって学ぶ楽しさを感じているのでしょうか。楽しさを感じることができる授業にするには、まずは教師自身が楽しさを感じていなければならないと思います。授業づくりには生みの苦しみの部分はあると思いますが、子ども達との授業は、楽しいものになってほしいと思います。少なくとも私が１年間参観してきたＢ教諭の理科の授業には、子どもと教師、両者に楽しさが見て取れました。

令和３年１月の中教審答申にて「令和の日本型学校教育」を担う教師の学びの姿が示されました。「自律的かつ継続的に学び続ける教師」、「子ども一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たす教師」、「子どもの主体的な学びを支援する伴走者としての能力を備えている教師」であることが期待され、その資質・能力の向上が求められています。Ｂ教諭の授業では、特に子どもの学びを支援する“伴走者”としての指導がなされていると感じました。これまでの授業は「与えて・させて・見回り・急がせる」指導が中心で、教師は「ティーチャー＝教える人」であったと言われています。今日、資質・能力を重視し、子どもの主体的な学びが重視されるようになり、子どもの学びを支援する“伴走者”としての役割が求められています。「聞いて・助けて・任せて・見守る」学習支援と言えます。教師は「ティーチャーからファシリテーター」になり、教えようとしない、聞き出す・引き出す学習支援になるよう授業改善が強く叫ばれています。各学校では授業改善に一丸となって取り組んでいるかと思いますが、授業改善はまだ十分ではない状況と言えます。授業改善のまずはと言われているのは、教師主導型の授業からの脱却です。教師主導型の授業において、子どもは学ぶ楽しさを実感できているでしょうか。授業改善がなかなか進まない（変えられない）中、子どもの視点で現在の授業を見つめ直してみてはどうでしょうか。子どもが、できた！分かった！うれしい！楽しい！と思える授業を私たちは目指しているはずです。子どもにとって魅力ある授業になるよう改善することが急務であり、子どもにとっての学び舎である学校の存在意義があるのだと思います。

【小教研関係全般】

言わば「チームあだち」の体現

福島県小学校教育研究会安達地区会長　及川　博睦
（二本松市立杉田小学校長）

小教研は、今年度、第８期の３年目を迎えました。基本主題「児童自らあらゆる他者と豊かにかかわり、未来社会の創り手として必要な力を育む授業の充実」を受け、安達地区のそれぞれの研究部では、各研究主題のもと熱心に研究が進められております。実践・研究の発表や協議が進められ、多様な学習指導のあり方が安達地区全域に広められておりますこと、さらにはご指導ご助言をいただくことにより、成果と課題を明らかにし、第９期の研究につながる小教研となるよう取り組まれておりますこと、会員の皆様に心より感謝と敬意を表します。

１０月２日、油井小学校と安達公民館で開催されました福島県小学校教育研究協議会社会科研究部会安達大会におかれましては、社会科部員を中心とした安達地区会員の皆様による手厚い準備と堅実な運営により成功裏に終えることができました。このことは、安達地区会員のチーム力、例えば安達地区各校から社会科部員として４４名もの多くの先生方に入部していただいたという、言わば「チームあだち」の意気の表れであり、それを体現した大会だったと感じております。特に、西屋　純　先生、坂下三由紀　先生による公開授業につきましては、社会科の授業のあるべき姿をご教示いただき、多くの参加者から称賛のお声をいただきました。令和４年度から３年間にわたる安達地区での県研究協議会社会科部会は、お二人の公開授業の成果と社会科部員の皆様のこれまでの努力の成果をもって完遂に至りました。改めまして、安達地区社会科研究部長をはじめとする社会科部員の皆様、授業者のお二人、油井小学校教職員の皆様、関係された皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。

さて、小教研の活動は、様々な研修を通して、教材開発や指導技術など授業づくりのヒントになることをたくさん学ぶことができます。また、何かと相談できる先輩や仲間づくりの場でもあり、教員として成長させてくれる場でもあります。近年は、教職員の年代構成も変わってきておりまして、若い先生方が増えてきています。様々な年代の先生方がそれぞれの個性や能力を生かして教え合ったり、経験豊かな先生方がこれまでに身に付けてきたことを若い世代の先生方に伝えたりすることが必要です。今後とも、会員の皆様が、小教研の研修を通してお互いに学び合い、一人一人の指導力を向上させるとともに、次世代を担う先生方が豊かな感性と指導力を身に付け、未来を創る子ども達の確かな学びや生きる力の育成につながっていくことができるよう取り組まれることを切に願っております。

来年度からの３年間は第９期の研究期間となり、安達地区内においては、道徳科について県研究協議会が開催されることとなっております。今年度の社会科部会同様に、「チームあだち」の意気を道徳科の研究公開においても体現できるよう、小教研安達地区事務局としても精一杯取り組んで参りますので、皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

【社会科研究部会安達大会 公開授業の様子】

【特集テーマ】

主体的に判断・行動する力を高める防災教育の充実を目指して

本宮市立本宮小学校　佐久間　仁

本宮市は「みずいろの町」と呼ばれます。阿武隈川は白鳥の飛来地になっており、学校近くにあるみずいろ公園は市民の憩いの場になっています。普段は穏やかな川ですが、令和元年の東日本台風では、阿武隈川が溢れ、安達太良川の堤防は決壊。町の中心部が洪水の被害を受け、学校は一時地域の避難所となりました。その後、市は、堤防のかさ上げ工事を行い、市内の避難所にサテライト防災備蓄倉庫を建てるなど、災害に強い町づくりを進めてきました。あれから５年が経過し、水害の記憶のない子ども達が入学するようになりました。地球規模で見ても災害が増えつつあると考えられる今、子ども達に災害の記憶をどう伝えるか、また、自他の命を守る力をいかに身に付けさせるかが急務になっていると感じます。

今年度、本校では、学校経営・運営ビジョンの重点実践事項の一つとして「主体的に判断・行動する力を高める防災教育」を掲げました。市の地域防災マネージャーを招聘して防災講話を行ったり、避難所体験を行ったりしています。防災講話では、地震や火災、台風や大雨による水害などが起きた際の安全な行動の仕方を学んでいます。避難所体験ではパーテーションや段ボールベッドの組み立てなどの活動を通して、避難所での疑似体験をしています。学校運営協議会の組織を生かして、保護者、地域住民も避難所の設営に協力する機会を設けています。学校での学びを地域で生かすことで、被害を最小限に食い止め、一人でも多くの命を救うことが大事だと考えます。

校長としては、教頭、教務、防災担当と連携し避難所運営計画の検討、学校の防災教育全体計画の作成、防災に関する活動の充実を図ってきました。また、家庭や地域、市の防災対策課との連携を図るためのパイプ役を果たしてきました。今後も、目指す子ども像を共有し、チーム本小一丸となって、主体的に判断・行動し、自他の命を守る力の育成に努めてまいります。

【特集テーマ】

つながりが生まれていく学校と地域に

二本松市立岳下小学校　車田　敦子

「ほら、車が来ているよ。気を付けてね。」「元気に登校できてよかったね。」毎日、登下校する子ども達に地域の方々が声をかけてくださいます。学校はたくさんの方々にあたたかく見守られ、支えられているのだなということを感じる毎日です。

「学校のためにできること、やってあげたいと思っているのよ。」これは、昨年度、学校運営協議会委員の方からいただいた言葉です。地域にとっての学校、学校にとっての地域ということの大きさ、その「つながり」の大切さを改めて考えさせられました。

今年度、コミュニティースクール２期目がスタート。新たに大学生を含む様々な年代の方に関わっていただくことになり、それぞれの立場から意見が交わされています。「〇〇を活用したらうまくいくよ」「こんなことなら、できますよ」・・・ボランティアに来ていただいたり、地域の方とつないでいただいたり。回を重ねて感じることは、毎回、新たな「つながり」が生まれ、前向きな思いが残ることです。

また、新たな地域の「つながり」のひとつとして、運動フェスティバルの中学生ボランティアがあります。２４名が協力してくれました。子ども達にとって、自分たちのために働いたり、応援してくれたりする姿は、中学校を身近に感じ、心強いものになりました。

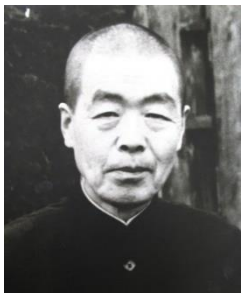
学校と家庭、地域があたたかくつながり、みんなに見守られているという安心感の中で子ども達はのびのびと育っていくことができるのだと思います。さらに、子ども達自身が地域へつながっていく、新たな「つながり」が生まれていく学校でありたいと考えています。

【趣味・随想】

塩沢小第８代校長
竹内実先生に思いを馳せる

二本松市立塩沢小学校　菅野　芳弘

塩沢小学校校門の向かい側には地域の偉人「竹内実先生」の銅像・記念碑があります。竹内実先生は、本校第８代校長で、生涯にわたって塩沢地区の発展・教育の振興に尽くした人物です。塩沢地区の顕彰会により昭和４４年に銅像･記念碑が建立されました。それらが撤去されるという文書が今年１月地区内に回覧されました。竹内先生のご子孫が高齢になり､管理できないということが理由でした。



この事実を聞いて、学校の同窓会長さんに話をしたところ、同窓会の費用で学校敷地内に移設し、同窓会で管理することになりました。

竹内実先生は師範学校を卒業して、塩沢小学校に泊まり込みで勤めました。そのまま転勤せず２０代で校長になり４０代半ばまで塩沢小にいらっしゃいました。その後３校の校長を歴任し退職しました。退職後も自宅を使って自費で季節保育所を開きました。実先生の奥様も塩沢小及び保育所で働き、当時、塩沢に住んでいる人のほとんどが竹内夫妻の教え子でした。

竹内実先生の銅像は無事、塩沢小敷地内に移設しました。実先生のご息女である平間志く子様にご来校いただき、実先生について子ども達にお話してくださいました。実先生は、今でも塩沢の子ども達を優しく見守っています。地域に人生を捧げた竹内先生に思いを馳せる今日この頃です。竹内実先生について、詳しくは塩沢小ホームページ「学校紹介」及び「トピックス 4/24」をご覧ください。

【趣味・随想】

好きこそものの上手なれ

二本松市立新殿小学校　高松　宏光

多趣味は無趣味とも言われますが、本当に自分が好きなもの・熱中できるものと聞かれると、なかなか思い浮かびません。いろいろな事に手を伸ばし、今残っているものといえば、まず思い浮かぶのが【自動車のカスタム】。仕事ばかりだった父が、たまに自動車販売店に連れていってくれた影響でしょうか。次に【観葉植物収集】。もう、部屋はジャングルのようです。そして、【仏像巡り】。歴史好きだったこともあり、京都をはじめ様々なお寺に行っては眺めています。そして、最近はまっているのが【西洋絵画】。もともとは全く興味がありませんでしたが、サブカルチャーや西洋芸術に関する造詣が深いタレント《山田五郎》さんの影響です。私の最も好きな人物の一人で、その博識ぶりは神のごとしです。その山田さんが YouTube チャンネルで西洋絵画の解説番組をはじめていると聞いて、飛びつきました。すでにその番組の視聴も３回目のターンにはいり、メモしたり本を購入したりして楽しんでいます。いつの間にか､西洋絵画の｢歴史的変遷｣を理解し、ドラマや映画にチラリと出てくる絵画作品にも気付くようになりました。最近では、廊下に掲示されている子ども達の図画作品を目にしては、「これはシスレー風だなぁ」「こっちはモネっぽい」など、勝手に悦に浸っています。『好きこそものの上手なれ』とは、よくいったものです。

学校現場に若手教員が増えてきています。仕事に楽しみを見い出してほしい、と心から思います。指導力の向上にはゴールがありません。どこまでも突き詰められる、最高の楽しみにしてほしいものです。腕が磨かれれば磨かれるほど、心に余裕が生まれ、子ども達の成長も目に見えるようになり、結果自分自身の喜びも高まっていきます。

徳島県鳴門市に【大塚国際美術館】があります。世界のあらゆる名画を陶板複製画で展示している日本が誇る美術館です。出来ることならパリのルーブル美術館やオルセー美術館に行ってみたいところですが、なかなか難しそうなので、近い将来訪れてみたいと思っています。

【新会員として】

「ほんとの空」があるふるさとで

二本松市立油井小学校　髙橋　政喜

「ほんとの空」がある安達太良山の空を見上げるとホッとします。幼い頃から眺めていた風景であり、ふるさと安達の地で勤務できることへの安心感があるからだと思います。

勤務地の油井小学校は、ご存知のとおり洋画家・紙絵作家の高村智恵子の母校です。詩人・彫刻家の高村光太郎を夫にもち、愛と美を追究した地域の偉人として顕彰されています。総合的な学習の時間には、４年生が高村智恵子の生涯について学びます。地域の研究家から話を聞いたり、記念館を見学したりして、地域が育んだ偉人の生涯をまとめていきます。６年生は、高村智恵子の顕彰祭に参加して、詩集「智恵子抄」の中から自分で選んだ詩を朗読します。朗読後になぜその詩を選び、何を考えたのかを発表します。「ふるさとの意味とは」、「人を愛するとは」について６年生なりの考えを地域の方に伝えます。このような活動をとおして、地域を知り、地域を誇りに思い、地域を大切にする心を育んでいくのだと改めて感じます。「ほんとの空」という言葉は、「智恵子抄」の中で智恵子が語ったと述べられている安達太良山の空のことです。

智恵子のふるさと鼓笛パレード

私自身、安達地区での勤務はそれほど長くはありませんが、勤務した学校では安達の先生方にご指導いただき、育てていただいたと感じております。「教員は授業を振り返り改善していくことが大事」「学校は楽しい場所でなくてはならない」など、安達の大先輩に教えていただいたことが今でも自分の教育観、学校観の根底にあります。少しでも先輩方の教えに報いることができるよう、「ほんとの空」があるふるさとの下、誠心誠意努力して参りたいと思います。

【新会員として】

１５０歩からの第一歩

大玉村立玉井小学校　五十嵐　洋之

「楽しかった、またくるよ。」「なんでも言ってね。」「子ども達から元気もらったよ。」

来校された学校支援ボランティアの保護者や地域の方々の温かい声。いつも励まされ、教育活動充実に向けた取組の原動力になっています。

大玉村では「おおたま学園構想」のもと、小さいというスケールメリットを最大限に活かし、幼・小・中の連携・協働、おおたま学園コミュニティ・スクール、大玉村地域学校協働事業が学校のニーズ・課題に応じて効果的に運用され、「大玉村全体で子ども達を育む教育」が推進されています。

学校を支える支援ボランティアに登録されている方も非常に多く、読み聞かせはもちろん、農作業指導・水泳指導・陸上指導・彫刻刀指導・体力テストサポート・昔遊び・地域の伝統文化の継承等、ほぼ毎日、いろいろな活動で教育活動に関わっていただいています。みなさんの温かいお声掛け、子ども達を見守る温かい眼差しが子ども達の安心感につながり、何事にもチャレンジする意欲的な姿を引き出しています。まさに、「村全体で子ども達を育み、地域とともに歩む学校」を体現していると感じています。

地域とともに歩む玉井小学校も昨年度１５０周年を迎えました。現在子ども達は、スローガン「ふみ出そう　１５０歩からの第一歩　最高の学習発表会に」を胸に、「地域の方々に感動を届けよう」との思いをもち、学習発表会に向けてひたむきに練習に取り組んでいます。今後も子ども達はもちろん、地域のみなさんの笑顔あふれる学校づくりに努めて参ります。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

【新会員として】

ふるさとの山に見守られ

本宮市立岩根小学校　安藤　靖

前任校への道中では、塩沢から安達太良山を仰ぎ見て、土湯峠では吾妻山を横目に眺め、トンネルを抜けると、正面に磐梯山がドンと姿を現す、贅沢なほど福島県の自然を満喫していました。

そんな私がふるさとを感じ、心がシャンとするのは国道４号上り線の大壇口から見える「安達太良山」の美しい稜線です。「今日も御山はきれいです。（がんばるぞ！）」「おお、きれいだなぁ。（今日はどんなことあるのかな？まっ、楽しみましょ。）」とポジティブにしてくれるのが「ふるさとの山」安達太良山です。

岩根小学校の校歌には、「春蘭かおる館山に～みんな元気で励もうよ」「安達太良山の雲はれて～心あわせて進もうよ」「愛宕の山ももみじして～明るい社会を築こうよ」と、岩根のふるさとの山が三つも歌われています。山に囲まれた安達で育った人間にとって、ふるさとの山は「励まし、見守り、前に進む勇気をくれる、時に圧倒的な美や恵みも与えてくれる、無くてはならないもの」だと感じます。ありがたい存在です。

岩根小学校に赴任した今年、この「ふるさとの山」から感じるものを、たくさんの「人」からも感じています。私が教諭・教頭時代に、この安達地区でお世話になったたくさんの方々が、「ようこそ」「がんばって」と声をかけてくださいました。うれしいことこの上無しです。そればかりか、前任の猪苗代地区でお世話になった方々やその縁の方からも、同じように歓迎と励ましの声をかけて頂きました。感動でした。

たくさんの方々やふるさとの山に見守られて、ここまで進んでこられたことに心から感謝し、さらに前へと歩みを進めていけるよう、努めて参ります。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

「ふるさとの山」と「ほんとの空」を眺めて、今日も、学校へと向かいます。

「今日はどんなことが起こるかな？」

霞ヶ城公園天守台から臨む安達太良山

【新会員として】

朝のあいさつから

本宮市立白岩小学校　佐藤　健夫

「おはよう。」毎朝、登校してくる児童たちに声をかける。私のあいさつの定位置は校舎南側の校門付近の駐車場前。反対側の校舎北側から登校してくる児童は、半分ぐらい。西側からの児童もいるので、この位置で迎える児童は３分の１程度であろうか。

児童の大半は保護者の車で送られてくる。

駐車場を大きく回って私の前で児童たちは車を降りる。次から次へと近づいてくる車内からフロントガラス越しに多くの保護者はあいさつをしてくれる。そして子どもを降ろすときにまたあいさつ。車を再発進させるときにまたあいさつをしてくれる。なんと３度も頭を下げてくれるのだ。この３回のあいさつを行って行く車、２回の車、１回の車、１度も無い車と、様々である。

車を降りる短い時間にも様々なドラマがある。

「行ってらっしゃい。」「行ってきます。」と互いに手を振る親子。無言で一度も振り返らない児童。なにやら言い合っている親子。無反応の親子。毎日その流れを観察していると、それなりの推測と考察ができてくる。同時に自分がこれまで子ども達にどんな接し方をしてきたかも振り返り、反省する。

車を降りてから歌を歌いながら元気にあいさつして歩く児童。眠たそうに欠伸をしながら歩く児童。いつもうつむき加減に歩く児童など様々である。

先日の学習発表会では思いっきり表現活動をしていた児童たち。一様に保護者の方々もうれしそうであった。次の日の朝の登校する児童たちの姿には、「お家の人に見てもらえた」と少し誇らし気の様子が漂っているように見え、こちらも心弾む思いがした。